

# 世界水フォーラムの意義と課題

北海道大学大学院工学研究科 真柄泰基  
教授

第3回世界水フォーラムが3月16日から23日までの1週間、大阪、京都等関西地区で開催された。1997年にモロッコのマラケッシュで第1回が開催されてから、2000年のオランダのハーグに次いで開催されるアジア初めての会議で、参加者も8,000人を超え成功裏に終了したと言える。

国連は1980年から1990年を「世界水と衛生の10年」として、世界の人々が安全な飲み水と、し尿の衛生処理を享受できるようにと、国際機関、工業先進国が開発途上国と共にその普及に努めてきた。しかし、残念ながら、その目標は達成されるに至らず、1992年の地球環境会議で採択された「アジェンダ21」の第18章では、水と衛生のことも含めて水に係わる問題の重要性が指摘された。そして、天然資源としての水の管理、地球環境としての水の保全という水全体の枠組みの中で安全な飲み水と、し尿の衛生処理の問題が取り組まれ、さらに、21世紀は水が人類の存亡の鍵と認識され、そのための行動計画をつくるためにマラケッシュから世界水フォーラムが開催されてきた。

地球は水の惑星といわれるように、水があってこそ人類もほかの生物も共存して平和な世界を営んできた。しかし、世界の人口は増加の一步をたどり、例えば1975年に40億人、2001年には60億人に達し、2015年には80億人になると推定されている。人口が増えたからといって、水資源の量は一定であるから、一人当たりの水資源量はますます減少していくことになる。1970年代から、人口増加に伴い食糧の生産も増加しているが、世界の耕地面積の増加は人口の伸びよりも低く、実は灌漑水面積を増加させることによって、飢餓の問題をある程度解決してきたのである。しかし、灌漑水面積の増加は中国の黄河の断流、アラル海の縮小、土壌の塩類化に伴い耕地を放棄せざるを得ない地域が世界各地で頻発するなど、さまざまな問題を生んでいる。あるいは、飲み水として利用している地下水中のヒ素で何千万人にも及ぶ人々が深刻な健康障害が発生しているのも、地下

水を灌漑用水として利用して食糧生産を高めたことが原因であると指摘されている。

このように、安全な飲み水、食糧生産のための水、工業活動に必要な水、さらには環境の生態系保全のための水や、一方では洪水による被害防止等水に係わる問題はお互いに絡み合っており、まさに、世界の知恵を結集して、希少な水資源の管理の在り方を構築しなければならない時代になっていることが、改めて強く認識されたのがフォーラムの成果である。

2015年までに世界の人々で、安全な飲料水と、し尿の衛生処理の恩恵を受けていない人々を半減させようとする目標が再確認された。このために必要な資金は5兆ドルと推定されており、膨大な資金を世界銀行のような国際機関や我が国のような工業先進国の公的な資金で調達することは困難であることから、民間資金を導入しなければならない。つまり官・民のパートナーシップを強化しなければならない。民間資金ということになれば、その資金は必ず返済しなければならない、料金等で支弁しなければならない。開発途上国の飲み水の供給や、し尿の衛生処理についても民間関与や民営化ばかりでなく、コストを料金でカバーすることを求められようとしていることになる。我が国の憲法25条で示す生存権に関わる部分まで生活者が料金で対応することに、多くの異論があることも事実であり、閣僚宣言でも貧困対策としてのインフラ整備については特別の配慮をすべきとしている。

世界水フォーラムでの議論はともすれば、開発途上国の問題を議論しているように受け取られているが、実は、コストは料金で、民間関与と民営化の議論は、我が国の水道や下水道、水環境保全等我が国の水政策を今後どうしていくべきかの方向性にも影響を与えるものであり、閣僚宣言は我が国の水政策の在り方を転換すべきものと提言していると考えべきである。(まがら やすもと)